「十字架につけられる」　2023年12月01日

〔その時、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか分からないのです。」〕（ルカ23：34）

そして、「イエスよ、あなたが御国へ行かれるときには、私を思い出してください」と言った。するとイエスは、「よく言っておくが、あなたは今日私と一緒に楽園にいる」と言われた。（ルカ23：42～43）

主イエスは、イスラエルの最高法院の思惑通り、ローマの総督ピラトからローマに反逆する政治犯として十字架刑へと引き渡された。主イエスの十字架はキリスト教にとって最も中心になる出来事である。その十字架の出来事を、著者ルカは四つのことで伝えている。

1.十字架刑が宣告された者は自分がかかる十字架を背負って、「されこうべ」と言われる刑場まで歩かなければならない。ところが主イエスは、昨夜から、打ち叩かれ、一睡もできない状態で罵倒されながら、最高法院での裁きを受け続けた。体力は消耗し切って、十字架を負うことができなくなった。そこへ、通りかかったキレネ人シモンに主イエスに代わって十字架を担がせた。シモンは十字架刑の罪人の代わりに十字架を負わせられたので、憤懣やるかたない。しかし、ローマ兵の命令だから、拒むことができない。主イエスの代わりに十字架を背負って刑場まで運ばざるを得なかった。このシモンについて、マルコ福音書は「アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人（マルコ15：21）」と説明している。アレクサンドロとルフォスは初代教会において、著名なキリスト者であり、彼らの父がシモンであると伝えている。パウロはローマ書16章13節で「主にあって選ばれたルフォスと、その母によろしく。彼女は私の母でもあります」と書いている。このルフォスがシモンの息子ではないか。シモンはローマ兵に強制されて、主イエスの十字架を無理やりに背負わされたが、それが、契機になって、二人の息子は著名なキリスト者になり、シモンの妻はパウロから「私の母」とも言われるほどの信仰者になった。十字架を負わされた苦難が、シモン一家をキリスト信者に生まれ変えさせたということである。これは、素晴らしい出来事ではないか。人は皆、苦難を避けたいと願っているが、シモンにとっては、主イエスの代わりに背負わされた苦難が家族の救いになっていった。シモンの体験から、負わされた苦難は負ってみよ、主イエスの十字架を自分の救いとして見出し、福音に与る契機になると伝えている。

2.ピラトの官邸から刑場までの道筋で、主イエスの十字架刑を悲しむ者の泣き声、逆に、主イエスを蔑む者の罵倒などが交錯したであろう。この道行に、二人の犯罪人が死刑になるために引かれて行った。そして、「されこうべ」の刑場に着くと、主イエスを十字架につけた。二人の犯罪人は、主イエスの右と左に、十字架につけられた。十字架刑は、人間が考えた刑の中で、最も残酷な刑であると言われている。T字型の木に、広げた両手を釘打ちし、足も釘で打たれた状態で、放置する。下に落ちてゆく体を上に持ち上げようともがくが、体力を失い、持ち上げられなくなり、窒息死する。2、3日苦しみ抜いて死んで逝く。この間の苦痛は計り知れない。主イエスは苦痛の十字架上で、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか分からないのです」と言われた。この部分には〔〕が付けられている。〔〕は、主イエスご自身の言葉ではなく、著者ルカが主イエスの口に乗せたもので、この言葉に、神に罪を執成した「赦し」が成就したとのメッセージを込め

ている。このメッセージが福音の核心である。「赦し」を最も重く受け止めたのは、主イエスを神殿当局に売り渡したユダを除く、11人の弟子たちであろう。彼らは、命を賭して主イエスに従うと表明した。ところが数時間後、主イエスが当局の衛士に捕縛されると、蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。ペトロにおいては、大祭司の庭で、主イエスを知らないと三度も否んだ。その時、主イエスの予告通り鶏が鳴き、彼は自分自身に深く絶望したであろう。更に、弟子たちは、主イエスの弟子であることを知られることを恐れ、身を潜め、とある部屋に隠れていた。そこへ、復活した主イエスが現れ「あなたがたに平和があるように」と言われた。この時、弟子たちは、自分たちの不誠実にもかかわらず、「赦されている」を知った。これは、神から人格を是認されているという、生の根底が支えられる喜びであった。弟子たちは、十字架と復活の出来事から「生の絶対的肯定」という「赦し」を知ったから、自分の足で立つ人間になっていった。教会は、主イエスの十字架上の執成しの祈りによって、神に赦された存在とされている福音を全力で宣教して来た。

3.民衆は苦しむ主イエスを見つめ、最高法院の議員たちは、「他人を救ったのだ。神のメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」と嘲笑った。十字架刑を執行したローマの兵士たちも「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と侮辱した。彼らの言う通り、主イエスは差別と抑圧を受けて、苦しむ者、悩む者、病む者たちを救ってこられた。今、ご自分が十字架で苦悩の絶頂にありながら、自分を救おうとされない。彼らの嘲りの言葉は、どん底の十字架の死にまで降られた主イエスにおいて、人間の罪が贖われ、赦されるという神の秘儀を言い当てている。第二イザヤは「主の僕の歌」で、「彼は私たちの背きのために刺し貫かれ／私たちの過ちのために打ち砕かれた。彼が受けた懲らしめによって／私たちに平安が与えられ／彼が受けた打ち傷によって私たちは癒された（イザヤ53:5)」と歌っている。無実の者が不条理な苦難を受け、その傷によって、人間が平安と癒やしに与るメシア像を描いている。パウロは、「十字架の言葉は、滅びゆく者には愚かなものですが、私たち救われる者には神の力です（Ｉコリント１：18)」と書いている。主イエスの十字架の低さが、人間に平安と救いを与える神の愛の力であった。

4.主イエスの右と左に、十字架刑を受けた犯罪人がいた。その一人が「お前はメシアでではないか。自分と我々を救ってみろ」と罵った。すると、もう一人は、「お前は神を恐れないのか。同じ刑を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない」とたしなめた。そして「イエスよ、あなたが御国に行かれるときには、私を思い出してください」と言った。

キリストの十字架刑

彼は、無罪でありながら十字架にかかる主イエスの振る舞いを見て、言葉を聞いて、深い感動に包まれたのであろう。御国に行く方だと受け止めている。主イエスは「よく言っておくが、あなたは今日、私と一緒に楽園にいる」と言われた。時は全て神の時・カイロスである。あなたは、今日、救いに与ると祝福の言葉を告げている。